

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

町のつながりをつくる：
ベルリンのスープ・フェスティバル
(私のスケッチ・ブック (29))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005912

町のつながりをつくる ——ベルリンのスープ・フェスティバル——

国立民族学博物館 教授
森 明子

■スープ・フェスティバル

2年ほど前の9月初旬、ベルリンに滞在していたときのことである。友人にすすめられてスープ・フェスティバルに行ってみた。

場所は、集合住宅が並ぶW地区境界である。見当をつけて行くと、まず通行止めの標識が目に入った。その先の路上では、両側にスタンドが並び、中ほどにテーブルもしつらえて、人の姿があふれている。ふたつの通りが交差する付近では特設ステージも用意され、パイプ椅子が並んでいた。

まずスタンドの列をのぞいてみる。親しい老婦人が私の姿をみつめて、マグカップとスプーンを私の手におしつけてきた。びっくりしたが、それは彼女から私へのプレゼントで、おいしいスープを食べなさい、という意味であった。

この祭りの主役はスープで、ずらりと並んでいるのはスープ・スタンドである。腕自慢の料理人が、特製スープを無料であふるまう。マグカップとスプーンは、スープを試食するための食器だった。

日本なら、プラスチックの容器とスプーンを大量に用意して、そのたびに使い捨てプラスチックが会場にゴミの山をつくり出すことになるだろう。だがここでは、各自がマグカップとスプーンを買って、それを繰り返し使う。そしてカップとスプーンは、明日から自宅の日常食器に加わる。せっかく丹精したスープをいただくのであるから、おもちゃのような器で食べるより、こちらのほうが味わいもあったと思った。

自前の容器は、もうひとつ別の効果ももつ。スープを分けてもらったら、きちんと最後までいただかないと、次のスープに手を出すことはできない。少しでも味見したい人は、よそってもらうときに、「少しにしてください」と頼めばいい。スープが替わるたびに食器を洗うなどということは、思いもよらない。スープの味が多少まざったところで、それは大した問題ではないからだ。もともとスープは、さまざまな味がとけあってできるものなのだから。

スープには、トマト味やクリーム味、フランス風やタイ風など、工夫がこらし



ストリートは、人であふれている

であって、素材もズキーニ、カボチャ、レンズマメなど、さまざまである。スープの内容紹介を見ながら、どれを味見しようかと物色して歩いてまわるのは楽しい。

見知らぬ人がみな、おそろいのマグカップとスプーンを手に、スタンドのあいだをそぞろ歩いている姿は、ほほえましくもある。たまたま目が合った見知らぬ人同士が、「これ、おいしいわよ」「どれどれ」などと語り始めたりする。気に入ったスープのレシピを熱心に尋ねる人もいれば、それを上回る熱意をもって料理法を伝授する人もいる。なかには、自慢のレシピをあらかじめコピーしておいて、配るグループさえあった。

ひとつのスタンドは、数人で運営されている。料理グループや、有機農業のグループ、また移民の女性たちが故国のスープを披露する、というものもあった。

私がスープめぐりをはじめたころ、いくつかのスープは、残りわずかということだった。それでもがんばって5種類くらいは味見し、おなかもいっぱいにな

ってきたころ、ステージに人々が集まってきた。

■フェスティバルの構成

ステージでは、まず主催者代表の挨拶があった。この人物は、「地区マネジメント」という市の予算を活用して、このフェスティバルを企画した。この予算は、ベルリンで貧困や失業問題を抱えているいくつかの地区に措置されるものである。

ここで、フェスティバルの行われたW地区について説明しておく必要があるだろう。W地区は、失業者やアルコール依存者の多い、ベルリンで最も貧しい地区のひとつとされている。外国人住民が4割以上、失業手当や生活保護手当での受給者が3割以上で、いずれもベルリンの平均をはるかに上回っている。

このような社会的疎外要因をはらんだ地区では、一方で地区住民間のコミュニケーションをはかると同時に、他方で地区が孤立してゲットー化しないよう、他の地区とのひらかれた関係を築いていく必要がある。

スープ・フェスティバルは、そのような社会的な要請にこたえるプログラムとして企画された。ここで特筆すべき点は、このような社会的なプログラムが、行政主導の政策としてではなく、住民が主体になった地域の活動として展開していることである。

挨拶につづいて、地区住民たちが登壇した。まず、地区でアイドル的といってもいい有名な老人が、W地区の歌を作詞

して披露した。これに主催者が曲をつけて、会場のみなが声を合わせた。さらに、5歳から10歳くらいの子供からなるドラム・グループが結成されて、歌にあわせてドラム演奏を披露した。学校生徒による演劇の上演も行われた。それらの合間に、音楽グループのボランティア演奏があり、会場の人々を楽しませた。最後に、審査委員からスープ・コンテストの結果が発表された。



レストランのスタンド。マグカップを大量に用意している

こうしたプログラムの構成は、このフェスティバルが地区のものであり、彼ら自身が楽しむことを第一の目的にしていることを示している。

その一方で、誰に対しても区別なくスープを供応することは、外に対して開かれているフェスティバルの性格をよくあらわしている。スープを大勢の人々にふるまうだけでなく、それにコンテストを盛り込んだことによって、フェスティバルは、きわめて広い範囲の人々に魅力あるものになった。それが地域の外にもいる腕自慢たちの意欲をかきたて、スープの質を高いものに設定したからである。

信頼できる審査体制と魅力ある賞品が、コンテストのレベルを高いものに設定した。審査委員には、日ごろ地域の問題に熱心に取り組んでいる11人が選ばれた。その顔ぶれは、芸術、教育に携わる専門家、ソーシャルワーカー、地元選出の議員などで、議員は異なる政党に属す複数の議員が、党の活動としてでなく、個人の政治家として参加した。

賞品には、複数の部門の優勝者に「黄

金のスープひしゃく」と旅行や賞金などが与えられた。

このスープ・コンテストには、200のグループが参加し、1,000リットルのスープが出されたという。コンテスト参加者のスープだけでは、フェスティバルを訪れる客に提供するには足りないことが、あらかじめ予想された。地元のレストランがフェスティバルのスポンサーとなつて、2,000リットルのスープを無償で提供した。合計3,000リットルのスープが、25,000人の客の舌を潤したという。

マグカップの頒布も、よく考えられていた。シンプルなカップとスプーンのセットは、会場のどこでも2ユーロ（300円前後）で手に入れることができた。こうした小道具の仕入れや販売にいたるまで、客の立場に立った、十分な工夫がなされていることに感心した。

スープ・スタンドは、コンテスト参加者が借料を払って使う方式になっていた。スタンドの場所によって、その利用料は何段階かに分けてあり、たとえば人



特設ステージの前で、音楽に手拍子を送る人々

通りも多く条件のよい場所では、40ユーロ（約6,000円）であったという。

このフェスティバルの企画運営は、資金調達や人の動員、参加者の意欲を高めるさまざまな工夫や安全など、多方面にわたって綿密な配慮と自由な想像力が生かされていた。このような企画を支える人のネットワークと、それをとりまとめていくかなり高度な組織力があることを物語っている。

■フェスティバルの背景

スープ・フェスティバルは、ベルリンで2004年にはじめて開催され、2005年が2度目だった。モデルは2001年にフランスの小さな町で行われたスープ祭りだったという。

これをベルリンに導入しようと考えた主催者は、「ともに料理し、無料でスープを分けあうことは、客人接待と隣人関係、そして生の楽しみの象徴だ」という。実際、フェスティバルに参加した私は、

楽しくておいしい、満足な気持ちで味わうことができた。

このような催しのタイプは、日本ではあまりない。その原動力は、どこにあるのだろうか。

たとえば日本の祭りの場合、都市であろうと村であろうと、神社をとりまく共同体があり、氏子たちが毎年の祭りを守っていく。信仰と伝統への敬意が前提としてあり、それが強い支えになっている。だがスープ・フェスティ

バルに、誰もが敬意をはらう氏子組織のような制度があるわけではない。

私のいまのところの理解は、きわめて積極的な「社会（福祉）活動」が、「地域おこし運動」と不可分に結びつくことによって、この独特の活力の源になっている、というものだ。

具体的には、ステージに登壇する住民として、子供、老人、青少年という異なる世代が配慮され、そのなかに多くの移民も含まれていた。また、日ごろは路上に座り込んでビールを飲んでいる長期失業者たちが、音楽にあわせて楽しげにダンスをする、のどかな姿も見られた。マイノリティとされる人たちがマジョリティとフェスティバルの場を共有していただけでなく、フェスティバルの中心に近い場所を占めていたのである。フェスティバルは、地区の外の人々に地区を発信することにもなった。

日本では、社会福祉と地域おこしを、まったく別ものとしてとらえる傾向があ



老人の歌と子供たちのドラムのコラボレーション

るが、このふたつの運動は反発しあうものではない。むしろ、ふたつが相補うことによって、層の厚い活動は、可能になる。

スープ・フェスティバルは、その活動の主旨が住民社会の福利にあると同時に、イベントにエンターテインメント性もそなえて成功していた。

■その後の展開について

ベルリンのスープ・フェスティバルは、2006年と2007年は開催されなかった。理由は、資金面での見通しがたたなかったためである。新自由主義体制のもとでの、社会福祉予算の縮小が影響していることは想像に難くない。だが将来に可能性がないわけではない。開催に向けた努力は、いまもつづけられているという。

ここで、ベルリンの外に目を転じてみよう。興味深いことに、フランスの町からベルリンに飛び火したスープ・フェスティバルは、ベルリン以外の世界の複数

の都市にも飛び火している。

バルセロナ（スペイン）、ボローニャ（イタリア）、クラクフ（ポーランド）、エアフルト（ドイツ）、そして中米のニカラグアでも、スープ・フェスティバルは行われたという。地域住民のあいだの新しい人間関係の構築、新しい共同体のありかたをさぐる模索が、世界のあちこちの都市で行われているようだ。

最後に“Suppe kennt keine Grenze”というスープ・フェスティバルのキャッチフレーズをひこう。「スープに境界なし」という意味である。「境界」が暗に示唆しているのは、マジョリティとマイノリティのあいだにある排除という境界である。そのような境界を越えた人のつながりを求めるメッセージを、スープ・フェスティバルは発している。